
忌望

ジュンちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忌望

【Nコード】

N7848Y

【作者名】

ジュンちゃん

【あらすじ】

大切な人を失った主人公は苦悩した。しかしある日、親友が発した一言は、彼を驚愕させる。それは死んだはずの恋人を見たというものだった。

堂々の（？）一作目。怪奇サスペンス。

ブローグ：バス事故（前書き）

暗めのお話で少し描写がアレかもしれませんが。悪しからず。作者、一応R14程だと思っております。

プロローグ：バス事故

『2011/7/14：バス横転事故発生。乗客と運転手、併せて十数名死亡。怪我人多数。走行中、運転手の不注意により対向車の確認が遅れる。ぶつからずに済んだものの、過度のハンドリングにより横転の模様。警察は引き続き詳しい調査をし、状況を明確にする。』

双眸にはテレビの画面が映りこんでいた。ただただ、呆然と見入っていた。悲惨な事故現場だ。そう、いつもの彼ならその程度の感想で済んだだろう。確かにさして違いはない。稀にニュースで目につくバスの事故だ。彼の身内が乗っているかもしれない点を除いたならば。

慌てて携帯電話を手に取る。彼の手が的確な操作を欠いているのは、急いでいるという理由からだけではいけないかもしれない。次から次へと分泌される焦りが、彼の携帯電話に付着する。その機械の無機質さは、まるで今から予測する事態を肯定するかのようだった。

「くッ…そっ、はやくッ…」

焦燥に駆られ思わず口走る。電波を通してコール音が携帯電話から聞え始める。呼び出し音が長い。永遠とも思える数度目のコール後、ようやく回線は繋がった。

「あつ！ 俺！ 俊一！ 母さん！？」

『……お掛けになった電話番号は、電波の繋がらない場所にいらっしやるか』

床に携帯電話が叩きつけられる。耳ざわりな音とともに破片が飛び散り、彼の頬を掠めた。繋がらない。

彼は途方に暮れた。何故か先程から不幸なイメージが拭いきれない。自分を熱心に教育してくれた母。昔成績が優秀だと誉めてくれた笑顔。その顔が、表情が、もう一生涯見ることができないような、そんな感傷を抱かずにはいられなかった。自らの頬を赤い雫が濡ら

している事に気付けないまま、壊れた携帯電話を見つめていた。

彼が唯一の肉親の不幸を聞くことになるのはそれから3時間後の事だった。

1章：親友

今朝登校してきた俊介の雰囲気は、親友の雄二でなくとも気づけるものだった。陰鬱な雰囲気漂っている。勿論彼は、俊介を放っておくことなどできなかった。

「おはよう、俊介」

何気ない朝の挨拶。自然と話しかけられたはずだ。落ち込んでいる相手に対して過剰な反応をとることが喜ばしい結果をもたらさないことを彼は知っていた。

「おがつ……よヴ」

「……っ」

彼は驚愕に目を見開いた。俊介の声は枯れていた。一か月叫び続けても果たしてこのような声になるものだろうか。声帯に異常があるのは明白だった。

注視すると顔も酷い。何をしたら頬がそんなに腫れるのだろうか。右頬に浅い傷口も確認できる。目の隈も異常だった。決して不細工ではなかった俊介の顔が、休日に見ない間、別人のような有様になっていた。

過剰な反応はしないと決め込んだ彼だったが、咄嗟に驚嘆の声を漏らした。

「おい……俊介。お前……」

果たして親友の声は届いたのだろうか。その言葉に全く耳を傾けず、自らの席まで歩いていく。今にも倒れそうな足取りで。

応じなかった事実など気にせず、席についた俊介にかけよった。異常事態だ。明らかに休息を取るべきだ。そう判断せざるを得なかった。

「なあおい、俊介、ほけんしつ」

「うるざっ……だまれ」

「……ッ!？」

初めての罵倒だった。いや、初めてというのは正確ではないのかもしれない。中学、高校とお互いを認め合った3年前。それ以来言い争いがなかったわけではない。しかしそれはお互いに信じ合っているからこそのものであったはずだ。信じ合っていたからこそ実直に、素直な気持ちをぶつけ合えたのだ。

ところが今の俊介の反応はどうだろうか。確かに俊介の気持ちを察したかと言われれば、ほとんどきてはいないだろう。だがそれにしても、何も言わず、話さず、拒絶するのはあんまりじゃないだろうか。

韜晦を決め込んでいる俊介に、これ以上話しかけることはできなかった。3年間で培った彼への信頼が、知らず頼をつたって落ちていった。

初めて雄二が涙を見せた。辛いことがあってもいつも笑顔で傍にいてくれた雄二。言いすぎた。少なくとも、何も言わずに突き放すべきではなかったはずだ。俺は心のなかで謝罪した。

いつもの授業風景だが、俺が見ている風景は全く別のものだった。黒板を写しながら時々雄二を見る。その姿は、常に窓のほうに視線を注いでいた。いつもなら授業に集中しているはずの雄二がそこにはいなかった。

さっきの……気にしてるんだろうか。そう思わずにはいらなかった。ずっと親友だった。お互いに認め合っていた。だが……俺は形だけとはいえ、傷つけた。些細なこともかもしれないがしかし、雄二との関係性の最大の禁忌を犯してしまったように思えた。

知らず、机にシャーペン突き立てていた。後ろの席のやつに注意され、我に帰る。

……頼るべきだったかもしれない。素直に自分の気持ちを吐露すれば、どれだけ救われたかわからない。

心の片隅に閉じ込めていた後悔が、熱が退いた頃、津波のように押し寄せてきた。教師の目を気にすることもなく、俺は机に突っ伏

し思案した。

昨日の事故で俺が失ったのは一人ではなかった。親を失い、恋人も失った。その時の俺は何を考えていたのだろう、気づけば時間だけが過ぎていた。ただ一つ感じたことは、何故俺だけ部屋でいうと生きているのだろうという罪悪感だった。

母と、彼女の志保。女手一つで俺を育てた母は、ゆくゆく結婚するのかもしれない俺等の付き合いを反対した。志保が一つ年上だったからだ。世間体を重視していたのだ。

しかし最初こそ反対されたが、徐々に徐々に志保は、俺の母の心を開いていった。ついには二人で旅行に行くにまで至った。

俺の記憶には今でも鮮明に焼きついている。志保を見るときに見せた母の、あの笑顔。そして何より、志保の安堵した表情。

『しゅんちゃん男の子だから、家でお留守番していてね。女二人でしか話せないこともあるんだから』

母の口からあんな言葉が出るとは俺自身、思ってもみなかった。その時志保は、母に認められたのだと思う。それが俺には自分の事のように嬉しかった。

その旅行の帰り、二人は帰らぬ人となった。

気づけば拳を握りこんでいた。皮膚が切れているのだろうか激痛が走るが、かまわない。痣だらけの手だろうが、母と志保はもっともつと辛い思いをしたのだから。

悔しさで飽和した俺の心は、やがて痛みを受け付ける隙間も許すことはなくなった。

2章：志保

ああ、もう……こんな時間か。

とつくに下校の時刻を過ぎていた。正直、何をするにしても身が入りはしなかった。黒板に示される明日の予定も、今の俺には鬱陶しいことこの上なかった。

雄二は……すでに席にはいなかった。一緒に帰宅することこそ少なかったが、必ず下校時には呼びかけあっていたことを思い出す。明日、謝ろう。声にしようとしたが、ヒューヒューと空気が揺れる音だけが鳴り、上手く発することはできなかった。昼食どころか水すら飲んでいないことに気がついた。机から中々離れたがらない体を無理矢理はぎ取ることにした。

いつのまにか自宅の前に立っていた。誰もいない家に、帰宅した旨を伝える。これも上手く言葉になりはしなかった。

すぐに自室のベッドに飛び込む。体が汚れているのも気にしなかった。何もしたくなかった。すぐに眠りにつこうと思ったが、様々な感情が頭を巡ってろくに寝れはしない。こんな生活が今後、日課になるのだろうか。

果たして人の死とは一体なんなのだろうか。何故、俺の周りの大切な人が死ななければならなかったんだろうか。

俺が物心つく前に父と離婚した母。女手一つで俺をここまで育ててくれた母。素晴らしい母親だった。神様は何故そんな母を殺したのだろうか。解らない。

理由は無いのかもしれない。生きている人は生き、死ぬ人は死ぬ。そう言ってしまうえばそれが全てなのだろう。

母と志保が死ぬまでは、俺だつてある程度は諦観していた。人が死ぬことに理由なんてない。ある日突然、奪われる。どうにもならないんだ。生きている以上必ず不条理はつきまとうのだろうか。だけど。

俺は仰向けになり、目を閉じた。納得のいかない現実を自らの外へ締め出すために。

だけど、それでも。まだ志保と母を連れていくには早かったはずだ。二人とも人生において絶望とは程遠い立ち位置にいたはずだし、なにより俺の生きる全てだった。今ならそれがわかる。どうしても連れていくのだったら何故俺も一緒ではなかったんだろう。

母の笑顔が見たい。もしも生き返ったのなら、母は俺になんと言うのだろうか。いつも通りの生活に戻るのだろうか。

志保に会いたい。会えたなら俺は謝り続けるのだろう。傍にいらなくてごめんね、と。

俺に尽くしてくれた志保。誕生日にサプライズパーティーをした時の驚いた表情。その後の幸せそうな顔は、一生忘れられないだろう。いつそ代わりになってあげたらよかったのかもしれない。一人が嫌いな志保は、それを嫌がるだろうけれど。

考えれば考えるほど、自分が保てなくなりそうだった。そう遠くはない未来、俺も二人の傍にいるのかもしれない。

部屋に常備しているペットボトルの中身を飲み干す。喉を通る冷たさすら鬱陶しかったが、幾分か喉はマシになったようだ。

「志保……」

静寂の中、ポツリと溢した一言は何とも言えない哀愁を帯びていた。

「雄二……」

今いる友にも考えを巡らせる。たとえそれが感情的になっていたとしても。自らが吐いた毒に、親友の態度が変わってしまったことはとても辛かった。長年の友情が今、崩れようとしているのだから。「雄二の家は何で幸せなんだろう」

ふと、不謹慎な言葉がよぎる。友情が揺らいだ今だからこそ、そんなことを考えてしまうのだろうか。

「雄二の家は何故幸せなんだろう。何故誰も死なないんだろう」
更に毒を吐いた。下劣で、卑劣な、悪臭すら感じる呪詛だった。

自らが発した言葉に驚いた。とてつもなく酷いことを考えた自分が最低の人間に思えた。

しかしながら俺の思考は止まらなかった。なぜ雄二の家でなく俺の家なのだろう。なんでこんなに不平等なのだろう。

一度味をしめた思考は止まらない。他人を乏しめる発言こそ、今の俺には、もしかしたら最も甘美なものかもしれないかった。

今日の雄二、俺の事を心配して話しかけたんだろうな。俺の事は何も知らないくせに。……そうか。何も知らないから話しかけたのか。もしかして適当なことを言って気を紛らわせようとしたのだろうか。

確かに俺が何も言わなかったのは誤解を招く行動だったかもしれない。だが雄二のやつだって、もっと配慮してくれたってよかったんじゃないのか？ いちいち干渉することが最善ではないと、判断するべきだったんじゃないのか？

自らを卑下するのと同時に、雄二がとても妬ましく、気持ち悪く思えてきた。

そうか。

納得する。配慮しないやつにはこちらでも配慮する必要はないではないか。

どこか薄ら寒い微笑を張り付け、俺は眠りについた。何故か、先ほどとは打って変わって安らかな眠りを得られることを、薄れる意識の隅で確信していた。

3章：再生

感情の熱は引いたはずだが、何故か友人に対する怒りがおさまることはなかった。雄二には俺の気持ちができるような言葉を投げかけてやる必要があるだろう。

登校した時には幾分か体調が楽になっていた。と、丁度教室に向かう雄二の姿を確認した。

「おい、雄二」

悪鬼のような顔で睨みつける。これで恐らく俺の考えは大体ご存じ上げるだろう。

「ああ！ 俊介……って、どうした？ 怖い顔して」

昨日とは打って変わった雄二の口調に、更なる怒りを覚えた。こいつは、昨日の事を覚えていないのか？

本格的な憎悪が俺の中を駆け巡った。取りたてて雄二が何をしたわけでもない。だが俺にはもはや分別がなかった。

「どうしたって……ふざけるな。俺の志保が死んだってのは昨日知っただろう？ それに対してのお前のぞんざいな態度。怒りが沸かないわけないだろう？」

雄二は不思議そうな表情を浮かべた。まるで何を言っているのかわからないといった風に。

「は？ お前、大丈夫か？ 昨日、お前の彼女、志保さんが死んだ？ そんなこと誰が言ったか知らないが、志保さんなら今日学校に登校してたぜ」

「え……？」

絶句した。志保が、学校に来た？ そんな筈はないのだ。ないじゃないか。こいつはそんな嘘まで……。昨日、朝礼で知らされたばかりじゃないか。

しかし、嘘をついた人間の仕草とは対照的に、雄二の瞳は真っ直ぐ俺を向いていた。心のどこかで、この情報を頼りたいと思った。

「あ、おい、ちょっと待てよ！」

半信半疑だった。しかし、例え嘘でも俺は頼らざるを得なかった。志保の教室まで走る。途中、上級生の視線が俺に注がれるが、関係ない。今は志保が生きていると言った雄二の言葉が重要だ。

「志保っ!？」

教室についた途端、休みなく走ったせいか猛烈な吐き気がした。押さえ込み、教室を見回す。

「……俊介君？」

果たして、そこに志保はいた。綺麗な黒髪に、透き通るような白い肌。バスの事故に巻き込まれる以前の、そのままの志保が。教室の奥、窓側に立っていた。

「……志保っ!」

僕は彼女をきつく抱きしめる。周りの視線はどうでもよかった。

放課後まで、吐き気がおさまることはなかった。教科書を鞆に詰めながら今朝の出来事を考える。と、雄二が話しかけてきた。

「なあ、今度志保さん 皆で 行かないか？」

昨日のことを気にしているのだろうか。腫れものに触るような雄二の態度。志保が生きていたことに浮かれていた僕はそれを半分に聞き流した。たぶん皆で遊びに行く計画でもたてたいのだろう。笑顔で僕は頷いた。

「ああ、今度皆で行こうな。物凄く楽しみだ」

僕の態度が昨日と違いすぎたせいだろうか、雄二はあっけに取られていたようだった。少し訝つてるようにも見えることから、相当毒を孕んでいたことがうかがえる。物凄く申しわけない気持ちで一杯になった。

「昨日はごめん。少し気がたっていたんだ。んじゃ、きょうはもう帰るから」

そう言い残して僕は帰路を急いだ。雄二と、その他の学生の視線を背中を感じながら。

家についても誰もいない。しかし僕には救いができた。志保が生

きていた。それだけで体が軽くなった気がした。抱えていた憂鬱も嘘のように消え去った。誰もいないが、しゅうかんかしたいつもの言葉を一人で投げかける。

「おかえり、しゅん君」

声がかこえた。きこえるはずのない僕の家から。その瞬間、絶句した。誰かがいる……。かぎは掛っていたはずだ。泥棒？ いや、違う。今の声は……

「か……母さん？」

恐々と返答する。だって母さんは……。

「ちよつと、何突つ立ってんの？ これから玄関掃除するんだけど？」

奥から出てきたのは間違いなく、母さんだった。僕を不思議そうに見つめている。いつも通りのきれいなえがおがそこにあった

4章：狂気

「おい、雄二」

呼び止められて雄二は振り向く。俊介だ。昨日のことがどうしても彼の脳裏を過ぎる。雄二も何も考えなかったわけではない。しっかりと俊介の境遇を模索しながら、迷っていた。何にしても、俊介の母と彼女はバスの事故で亡くなったのだ。

「ああ……俊介……って、どうした？ 怖い顔して」

戸惑いながら、考えてきた謝罪の言葉を連ねようとしたが、鬼のような俊介の顔に怯む。確かに自らが配慮に欠けた部分もあることは認めるが、このような憎悪の感情を向けられる理由はなかった。

「どうしたって……ふざけるな。俺の志保が死んだってのは昨日知っただろう？ それに対してのお前のぞんざいな態度。怒りが沸かないわけないだろう？」

想像通りの返答に内心ホツとする。これに対する答えは、模範をしっかりと考えてきた。

「……すまなかった。それよりお前、大丈夫か？ 昨日より更に具合悪そうだぞ。志保さんが死んで、登校するのも苦労してるんじゃないのか？」

「え……？」

俊介の目が何故か一瞬生氣を帯びた。何か不自然なことを言ったか？ そんなことを思った瞬間、いきなり俊介が走りだした。

「あ、おい、ちょっと待てよ！」

突飛な行動に思考が追いついていかない。とりあえず制止の声を張り上げたが、その声が俊介に届くことはなかった。

あの日から今日までの僕の毎日はじゅうじつしていた。失ったと思った母さんと志保が、とつぜんかえってきたんだから。今までと同じ、いや、それいじょうにじゅうじつした毎を送っていた。

まず、母さんに話しかけるひんどが上がった。あれからというもの、だれかといっしょに食事をとることが楽しくて仕方がなかった。一人で食べる辛さを知った。

志保とも良いかんけいをきずけていると思う。家にさそっても遊びに来てくれる。デートでは、たいがいまちに出る。なじみのきつさ店に入ったり、買い物をしたりだ。

ただ、二人ともあまりしゃべらなくなった。事故のこういしょうなんだろうけれど。あまり気にしないことにした。

今はただ、二人がかえってきたことにまんぞくしている。

今日も、ぼくと志保でいつものきつさてんに入った。ここのきつさてんは昔ながらのレトロなふんいきが気に入っている。

アイスコーヒーが手元にとどいた。持ってきたてんいんさんが少し顔をしかめた。何かおかしいことをしてしまっただろうか？ 志保と話しながらストローを口にふくむ。ふと、志保が僕の手をにぎってきた。僕はとてもてれくさくて、赤くなりながらも手を握り返した。すると

グジュツ、というぶきみな音が聞こえた。どこからか。どこから？ 僕がにぎった右手から。志保の右手から聞こえたような気がした。

見てみると、志保の手はとけていた。ぐじゅぐじゅに。かわがはげてベロベロになっていたのがいんしょうてきだった。僕ははきそうになった。志保はどうしたんだろうか。

いたいはずなのに、志保は何も言わなかった。僕はうすうす、なぜ志保がかえってきたのか気付いた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7848y/>

忌望

2011年11月23日13時45分発行